きすふれ　8

きす☆ふれ　8

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=23100128

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, エク霊, ヨシ霊, 最霊, ♡喘ぎ

㊗「みんな師匠が大好きです❣」開催!!
https://pictsquare.net/4hjjdihbq0l1ief8vmmugdrlxqtc5h11
無知シチュ師匠の総受けマルチエンドの一部をアップします。攻めたちが師匠を色々そそのかした結果、どうなるのか？今回はエク霊、ヨシ霊、最霊です。
良ければお付き合いください🌸

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

きす☆ふれ　8

「……はっ！？」
産まれて初めて告白されて、霊幻は夢現のまま、依頼現場にぼんやりと来てしまっていた。
（本物だったら……出直せばいいか）
本来、朝一番に芹沢と一緒に来るはずだったのだが、気が動転してアパートから直接向かってしまった。
「せんせぇ〜！！お待ちしておりました！！おや、一緒に来るはずの従業員の方は？」
手揉みをしながら建築現場の責任者が出てくる。
「ああ、すみません、２人の方が良かったですか？すぐ来させますが」
「いえむしろ好都合……いや、有名な先生がいらっしゃれば大丈夫でしょう！！ささ、先ずはアチラへ！」
ぐいぐいと責任者が霊幻の背中を押す。
「うわっ、何です、押さないで……これがオバケが出るという橋ですね」
橋の向こうに用意したパイプ椅子に案内しようとする責任者。
『必ず霊視しろ』
突然、最上の言葉が蘇って、霊幻は狐の窓で橋を見ようとした。
「あ〜っ、向こう！！向こうから霊視はお願いします！！」
突き飛ばすように押されて、霊幻の手がほどける。
「うわっ！？わかりましたよ！！押さないで！！」
渋々と霊幻は橋を渡る。
作ったばかりにも関わらず、『観光と景観のため』木で作られた橋は、何故だか黒ずんでいた。

『次はお前だ』

渡り終えた瞬間。
そんな声が聞こえて、霊幻は振り返った。

「何か言いましたか？」
「あ〜ッありがとうございます！！ではお帰りください！！」
封筒に札束を入れて責任者は霊幻に押し付ける。
「は！？打ち合わせは……えっ、多いですよ！！」
「足りないといけないので！！お帰りください！！お帰りください！！」
「ええ……わかりました……」
また渋々、霊幻は帰っていく。
「……成仏してくれよ……」
工事関係者たちは、その後ろ姿に向かって手を合わせた。

※

エクボと最上が難しい顔をして腕を組んでいる。芹沢がハラハラして成り行きを見守っていた。
「霊視しろ、と言った筈だが」
唸るように最上が霊幻に言った。
「え、そんなにヤバいの？全然体調不良とか感じないけど……むしろ調子いい」
「そういう呪法なんだよ。生け贄に一時的に祝福を与えて、その後、命を奪う。……厄介なモン引っかけてきやがって……」
バタバタと相談所に茂夫、律、将、花沢、ヨシフが合流する。
「何が、どうした」
「人柱だよ。『橋の渡り初め』と『魔橋』が混ざったような……まあとにかく、新隆くんが人柱に選ばれたんだ」
ヨシフが眉間に皺を寄せて、火の付いていない煙草を咥えた。
「なんとかなるんだろうな？最上センセ」
「もちろんだ。だが、無傷とはいかない」
全員が黙って最上に先をうながす。
「これは呪いではない。祝福のたぐいなんだ。だから呪いのように祓ったり、返したりでの無効化はできない。が、逃れることはできる」
「祝福から逃れる？」

「例えば『霊幻新隆』に祝福が与えられたのなら、名前を変えることで逃げられる。普通は祝福から逃げる必要は無いから、逃げ方を余り意識しないだろうが」
「なるほど……で、今回は？」
霊幻が冷や汗をかきながら最上に訊く。
「人柱の栄誉に相応しいのは、端的に言えば、処女だ」
「しょじょ」
「そも、あの橋に人柱を埋めてきたのは、川が氾濫して橋を流してしまうから、それを防ぐために龍神に花嫁を差し出してきたからなんだが……まあ細かい由来はいいだろう。要は花嫁にふさわしく無くなればいい。誰かに抱かれるのが手っ取り早いな」
「ふうん。誰に抱かれればいいんだ？」
ざわ、と霊幻以外が動揺する。
霊幻は無垢な瞳で、いつものようにキスフレのみんなが教えてくれるのを待っていた。
「霊幻、それは、お前が選ばなくちゃいけない」
真剣な顔をしてエクボがメモ書きを残す。いつも憑依してる人の電話番号だった。
「え、」
「初めては好きな人とやれ」
「自由に選べってことか？」
「違う。恋愛感情として、好きな人の元に行けってことだ。……ここにいるやつらは、お前に対して特別な感情を抱いてるんだ。その相手に処女を渡すってことは……分かるよな？お前が責任を取らなくちゃいけないことに、なりかねない。相手のこれからの、な」
ヨシフが電話番号を書いて席を立つ。将も。最上は悩んで、自分の名前を書き残した。
「よぉっく考えろよ。……ここの中の誰かじゃなくてもいい。誰に抱かれたいか、良く考えるんだ」

従業員である芹沢を残して、みなが相談所から立ち去る。

霊幻はしばらく腕組みして考えて。

「俺は……」

エクボに電話をかけた→
茂夫に電話をかけた→未実装
ヨシフに電話をかけた→
最上を呼び出した→
将に電話をかけた→未実装
律に電話をかけた→未実装
花沢に電話をかけた→未実装
芹沢に声をかけた→未実装
誰も選ばなかった→未実装

霊幻は、エクボに電話をかけた。

『……仕事が終わってから、駅前の調味ホテルで待ち合わせ、でどうだ？』
「わ、かった。必要なものとかは……」
『俺様が揃えていく』
「……悪いな」
『何がだよ。……気にすんな』

※

霊幻は調味ホテルのエントランスで、長い足を組んで、備え付けの新聞を読んでいるエクボを見つけた。

「お、来たか」
エクボは新聞を畳んで棚に戻した。
「行こうぜ」
霊幻は緊張して震えてくる。そんな姿に、エクボは小さく舌打ちした。

こんな初夜なんて、望んでいなかった。

「ズボンとパンツ脱げ」
「あ、ああ」
後ろの準備はしてきた。ごそごそと霊幻が下を脱ぐと、いつもの守衛に憑依したエクボもチャックを下ろして逸物を取り出し、ごそごととコンドームをつけた。
「……」
エクボは真剣な顔をして、薄いゴム手袋をつけた手でローションを塗りこみながらベッドに座らせた霊幻のナカを探る。
「大丈夫そうだな」
「……ん……」
九割の恐怖と、一割の期待。小さく頷いた霊幻を見て、エクボはぐ、とゴムに包まれた性器をうずめていく。
「う……っ、あ……！」
「よし、入った」
「ちょ、っと、まって……」
内臓から押し上げられるような圧迫感。その苦しさに、はく、と霊幻の口が空を食んだ瞬間。
「ほれ、しまいだ」
ずるり、とエクボの性器が霊幻の中から抜けていく。
「え？」
「これで処女じゃなくなった。……よし、祝福は消えてるな。挿れただけとはいえ、骨盤を広げられたんだ。違和感がすげえだろ。しばらく休んでからチェックアウトするといい」
「は？おい……」
戸惑って、思わず霊幻は立ち去ろうとしたエクボの袖をつかむ。
「どうした？」
「……っ」
ぐるぐると霊幻の思考が回って、結論を出さない。
「キ、キスしねえの？キスフレだろ、俺ら」
「……キスフレは終わりだ。俺様はもう、お前を友達とは見れない」

悲しくて、霊幻は思わずうなだれる。
「永い永い片想いの始まりだ。お前は被害者、俺様は加害者。手が届かない月を指咥えて見てる、お前から裁かれるのを待ってるだけの罪人だ」
「……エクボ、お前さ」
「は、あっ！？」
ぐい、と袖を引っ張って、霊幻はエクボをベッドによろめかさせる。
「いい奴ぶってんじゃねえよ。俺の無知に付け込んで、滅茶苦茶やったくせに、俺の赦し無しに改心してんじゃねえよ悪霊！！」
「れいげ、ん……ッ！？」
つたなく合わされる唇。ぎこちなく回される、腕。
「俺に、楽させてくれよ。きもちいいことと、たのしいことだけ、おしえてくれ」
ぐいとネクタイを引かれて、エクボは霊幻を押し倒す形にさせられる。
「……いいのか」
「知らねえよ。俺はお前に騙されてんだから。それより、ほら」
たのしいこと、ささやいて。
耳元でこしょりと言われて、エクボは身震いする。
「……好きだ」
「うん」
「愛してる」
「そっか」
「……お前は？」
「んー、知らないな」
「いつ分かる？」
いたずらっぽく霊幻は笑う。相手を化かすのに成功した狐のように、悪戯っぽく、妖艶に。
「きっと分かる時は来ねーよ。死が二人を分かつとも」
霊幻の白い指がエクボのシャツのボタンを、上から下に一つずつ辿る。
エクボの右手が性急に霊幻のシャツのボタンを外そうとして、うま

く外れなかったのかズボンからシャツの裾を引き抜いてくしゃっと胸の上にまとめた。
「ぁっ……何……？」
「前戯すんだよ」
色気の無い霊幻の白い肌着にすら、ツバがわいてくることにエクボはめまいを覚えた。
「ゃっ……ン、ッ……」
さりさりとした安い生地の上からほんのりと色が変わって見える乳首を引っかくようにいじられて、霊幻は覚えのある甘い痺れに鼻を鳴らした。
「おれ……おっぱい、無いぞ？」
「……きもちいいだろ？」
「あー……ぅん……」
これからどんな気持ちいいことをしてくれるのか、と期待する霊幻の無垢な瞳に、エクボは自分の悪党面がニヤリと映ったのを見てから、胸に吸い付く。
「ァア……ッ！ぇく……っ、シャツ、がっ」
「……」
はぁっ、とオスくさい息を吐いて、エクボはぐいとシャツも捲り上げる。
「ぁ……んゃ……っ」
角度を変えて何度も乳首にむしゃぶりつく。その度にぱらっとシャツが落ちてくるので、ぐいっと手で捲り上げていると、霊幻がシャツの裾をぱくりと噛んで固定した。
「……なんふぁよ」
思わず身体を起こして、自らシャツを捲り上げて見せる淫らな格好をしてみせていることに気が付いていない霊幻をエクボは眺めてしまった。
「……いや、……」
「なあ、乳首舐めるのもいいけど、そろそろ挿れようぜ。さっきいいとこに当たりそうだったんだよ」
「あ、ああ」
乞われるままにエクボはコンドームをつけて陰茎を数回しごく。無

垢な瞳で見上げてくる霊幻に、すぐ勢いを取り戻した。
「足、肩にかけてくれ」
「こう？……安定しねーな」
「じゃあ、……自分で、膝の裏持っててくれ」
霊幻の自ら陰部をさらけだすような姿勢に、ゴクリのエクボの喉が鳴った。
「えっちなことさせてるだろ」
じとりと睨んでくる霊幻に、エクボは苦笑で誤魔化した。
「……霊幻」
「ん……」
ぐ、ぐ、ぐ、と肉を押し割って入ってくる怒張に、霊幻は、はぁっと熱っぽい息を溢した。
「こわい、から、ゆっくり」
「……ああ」
言われるままに、エクボはゆ、っくりと押し入り、抜き出す。
「あぁああ……ッ♡」
ぞりぞりぞり、とカリに腸壁をこそがれて、ぞわぞわぞわっと霊幻は鳥肌が立った。
「くぅ、んッ♡えくっ、まって、まってぇ……っ♡♡♡」
「分かった」
ぴた、と中ほどでエクボは動きを止める。
「はっ……♡はっ……♡♡」
霊幻は甘ったるいにおいのする汗をにじませながら、必死に息を整えようとする。
落ち着こうとすればするほど、内部にくわえ込んだ欲望の形を意識してしまう。
だらだらと鉄くさい汗を流しながらも、霊幻を滅茶苦茶にしたい欲望を抑えてこっちを見つめている男のことも。
不埒な倒錯感にごくりと喉を鳴らしたら、そのはずみで中をきゅんっと締め付けてしまった。
「ぁっ、」
かくん、と霊幻の腰が抜ける。絶頂にイこうとする身体に、中途半端に埋められた楔が水を差した。

「ゃっ、えくぼっ、イかせてッ……！」
「動きゃいいのか？」
「た、たぶん？」
エクボは一瞬困った顔をしたが、とりあえず、と。
勢い良く、奥まで自身をねじこんだ。
「んあ゛っ♡♡♡」
せき止められていた快感が、一気に霊幻の頭の中で弾けた。キャンディーみたいな水晶が、ぱちぱちぱちぱちと背骨の中で暴れている。
「ん？イったか？」
ごつごつと何度も無遠慮に奥を叩いてくるエクボに、霊幻はこくこくと頷く。
「あー、じゃあ俺様もイくわ。ちと付き合え」
「やあああああぁあ……っ♡」
霊幻をむさぼろうとするエクボの動きで、落ちかけた絶頂にまた昇らされる。
「は、やく……イけっ……♡♡♡」
「おー、そろそろ……出るッ」
ゴム越しでも感じるほどの、大量の精。
「んッ、ん、ン……！」
ぐっ、ぐっ、と精道をこするように内部を押してくる性器に感じ入り、びくびく、と何度も霊幻は余韻イキして足をつっぱらせた。
「あー……」
スッキリした声を出して、エクボは霊幻に抱きつく。
「愛してる」
そう呟いて、霊幻は満足げに微笑んだ。

おしまい。

霊幻は、ヨシフに電話をかけた。
『……じゃあ、調味ホテルの４０４号室に来い。フロントで「デリバリーです。うがいぐすりの」って言えば部屋に案内して貰えるか

ら』
「……分かった」

※

かちゃ、とそおっとドアを開けて、霊幻はホテルの部屋に入る。
「……俺を選んだか」
タバコの先を見つめながら、ぼそっとヨシフが呟いた。
「あー、お前慣れてそうだろ？痛くしないだろうし、わりきれるかなって」
は、と霊幻がこれまで見たことの無い凶悪な笑顔をして、ヨシフが霊幻を睨み付けてきた。
「なんだそりゃ。あの悪霊が言ったことを忘れたのか？『ここにいるやつはみんなお前に惚れている』って。その上で俺なら気にしないと思ったわけだ。身体だけ慰めてくれると？舐めてくれるなあ？」
「そ、んな、つもりじゃ……」
びく、と思わず怯えた霊幻が目を落とす。こんな怖いヨシフを見るとは、思わなかった。
「中学生のガキじゃねえんだ。ヤらせれば黙ると思うな」
「……ごめん」
ぶっきらぼうだが、いつも優しく紳士的に接してくれるヨシフの冷たい言葉に、霊幻はきびすを返す。
「他をあたるわ」
霊幻の指先が冷たくなっていく。ヨシフを選んだ本当の理由を言えないまま、ドアノブに手をかけようとして。
「……おい」
白い煙でガチガチに固められたドアノブを目にして、じとりと霊幻はヨシフをねめつけた。
「……だが、他の男に抱かれに行くお前を見送れるほど、俺は大人でも無い」
「なんなんだよ」
拍子抜けして肩を落とし、霊幻はヨシフがあごをしゃくるのにつら

れるようにベッドに座った。
「……なんなんだろうな」
苦々しく呟いてタバコを口に持っていくヨシフの手元を見ると、灰皿が吸殻で満杯だったので、思わず霊幻は笑ってしまった。
「難儀なやつだよな、お前」
「……お前の無知に付け込んで、セクハラしてただけのやつだよ」
その懺悔に、霊幻の心がすうっと軽くなった。
この男を許してやろう。そう思えたら、口元が緩んだ。
「……俺もさ、お前の無知に付け込んでたんだよ」
「はあ？」
「お前が知らないのをいいことに、利用してた」
「……何のことだ」
スパイ活動をなりわいとするヨシフが霊幻のことで知らないことなど、無いと言っていい。もしや何か超能力者を使ってたくらみを、と緊張するヨシフに、たまらなくなって──悪くて美しい笑顔で、霊幻は身をよじった。
「俺さ、お前のこと、好きだったんだよ」
「……は？」
ぽかんと口を開けるヨシフを霊幻は手招きした。ベッドの方へ。
「なんかいいなー、ぐらいだったんだけどな。でも、ほら、お前、俺を……襲っただろ？それで嫌いになった。そんなやつだったのか、って」
「……」
ヨシフは黙って霊幻の隣に座る。
「でもさ……あのまま俺を騙してもっと色々しても良かったわけじゃん？今思うと」
「……調べたのか」
「そりゃあ、気になってな。キスフレのことも、セフレのことも調べたよ」
「……」
「取り合えず芹沢以外、全員一発ずつ殴っていいか？」
「……誰も抵抗しないだろうよ」
「まあ別にいいが。……おまえさ、めちゃくちゃ後悔してただろ、

俺を襲ったこと。あれだけ容赦なく犯そうとしてたのにさ」
「……」
「感情に負けるところもあるけどさ、お前はそれをよしとしないだろ。そういうところがさ……いいなって思うんだよな……誰かに抱かれなきゃいけないなら、お前がいいな、って」
ごくりとヨシフの喉が鳴った。今ベッドに座っていることを思い出して、ヨシフは妙にそわそわと落ち着かなくなってきたのを、鉄面皮で隠す。
「処女、貰ってくれるか？」
ヨシフに噛み付くように口付けられて、そのまま押し倒される。
シュル！と勢い良くネクタイが抜かれて、引きちぎるようにスーツやシャツのボタンが荒々しく外された。
「ちょっ、優しくしてくれよ！！」
その剣幕に霊幻が焦ると、「悪い、無理だ」、とかすれた声が返ってきた。
「よ……ん、んん……ッ！」
名前も呼ばせて貰えず、耳殻まで唇が滑るように口付けられ、まるで鉤爪で肉をずたずたに抉るように胸も腹もめちゃくちゃにもみしだいて行く雄雄しさに、霊幻はくらくらしてきた。
「まって、まって……ッ！あ、ぁあ……っ！」
ヨシフの合皮のジャンパーをくっと強く引いたら、押さえ込むように会陰をぐっと押し込まれて、甘イキした霊幻はびくびくと震える。
「んゃ……っ♡あぁ……っ♡」
引きちぎるようにズボンを下ろされ、下着を膝までずらして、ぐっと霊幻の性器をヨシフは握りこむ。
「ひっ……あぁっ！？！？♡♡♡」
急所を握られて霊幻は思わず喉から悲鳴をこぼしたが、かりかりかりかり♡と人差し指で痛くなるぎりぎりの強さで先端の穴をほじられて、何度も身をよじった。
「んぁっ♡あぁっ♡ぅあっ♡♡♡」
身体をはねさせずには耐えられない強い刺激。ぎゅっと竿を握られているから、射精することもできない。

「……洗ってきたんだな」
「そ、りゃ、ああああああッ！！！！♡♡♡♡」
ずずずず、と一気に奥までぶちこまれて、ぱぱぱっと快楽で霊幻の目の前に綿毛がスパークした。
あごの下がかゆい。潮吹きみたいにトコロテンしたせいでついた自分の精液がべとべとするのだと気が付いた時には、霊幻は何度も突き上げられて母音だけをこぼすおもちゃと成り果てていた。
「ｎおっ♡♡♡あっ♡あっ♡あ……ッ♡♡♡」
痛くないぎりぎりで、可能な限り乱暴に霊幻をむさぼる男の目が驚くほど冷静なのに気が付いて、霊幻はきゅんきゅんと内部をしめつける。こちらの弱みを握り続ける、恐ろしくて、恋しい瞳。
「はっ……はっ……」
ぎしぎしと激しくベッドが鳴る。尻たぶにパンパンと当たる陰嚢にずっとスパンキングされている気分だ。
（あ、イく……ッ♡）
「んん……ッ！」
霊幻はぎゅうとヨシフにしがみついて甘い衝撃に耐える。が、ヨシフは絡みつき搾り取ろうと蠕動する媚肉を引き裂いて、変わらない律動を霊幻に叩き込み続けた。
「あっ！？あっ♡あ……！」
追い詰められ続けた二度目の絶頂は、高く、深く。
ヨシフはびくびくと震える霊幻の足を満足げに撫でて。
「……奥に出すぞ」
ぐ、と壁をこじあけて流し込まれる熱い侵入物に、霊幻は小さく悲鳴を上げた。

※

「で？今はどうなんだよ」
ぽつりとこぼす背中に、霊幻は横になったまま思わずひっそりと笑った。
「何が」
「……好き『だった』って言ってただろ。今は、どうなんだ」

分かってて聞き返した霊幻に、不機嫌そうにヨシフは問う。
「ヤってから訊くかぁ？ズルいやつだな」
「……」
「お前はさ、どうなの？」
「もう知ってるだろ」
「お前の口から聞いてないんだけど」
「先生が言ったら言ってやるよ」
「へえ、じゃあ俺もそうしようかな」

意地っ張りな大人同士、ささいで大きな争いが幕を開ける。
無知を装うのか、知ったかぶりをするのか。いい年こいて小競り合いだ。

霊幻が誰に電話をかけたのか、その時点で答えは決まっているのだけれども。
二人とも、ちゃんと知りたいお年頃なので。

おしまい。

「……最上さん」
霊幻は最上の名を呼んだ。
「どうした？何か気になることでもあったのか」
ふわりと最上が現れる。
「いや。俺は……抱かれるなら、最上さんがいい」
最上は目を見開いた。
「そ……それは、意味が有るのか？」
「は？」
「祝福を受けられないようにするには、処女を喪う必要がある。その……霊体が身体を通り抜けても処女喪失にはならないと思うが」
「処女を失うってのはどういうことか、って定義の話？」
「儀式的に、認められるのかという話だな」
「どうなれば儀式的に処女じゃないわけ？」

「術者に寄るかもしれんな……」
「処女膜が破れる行為が処女喪失だとすると、ディルド突っ込むのとかもアウトなの？」
「……場合によっては」
「じゃあ実体化した最上さんのちんこ突っ込めば処女喪失なんじゃないの」
「まてまて、一般的に霊姦された女性を非処女とは定義せんだろう」
「でもエロ漫画とかだと剣の柄を突っ込まれて処女喪失、みたいな言い方もする」
「そもそも……男性なのに処女とはこれいかに……？」
「埒があかねえー！！取り敢えずヤってみて、呪いが解けてないかどうか診てくれよ」
「……いいのか、それで」
「ん？」
最上は苛立ちを隠すように霊幻から目を逸らす。
「知り合いだからと言って、好きでもない男に身体をいじらせて……本当にいいのか、と訊いている」
「えっ？好きだけど」
驚いて最上は霊幻を見る。
「悪霊相手にどうアプローチしていいか分からなかったし、最上さん恋愛に興味無さそうだったし、まあバレバレかなと思ってたんだけど」
「わ、わ、わ、分かるか！！」
「案外鈍いんだな」
「キミにだけは言われたく無い」
「最上さんは義務とか優しさかもしれないけど、だからさ、俺は……最上さんでいい、んじゃなくて、最上さんが、いいんだよ……」
「いやもう本当にキミにだけは鈍いと言われたく無いな」
「はあ！？」
顔を真っ赤にした霊幻の耳元に最上は口を寄せ、霊幻にだけ聞こえるように呟く。

「……っ！！」
霊幻は最上に抱きついた。

※

「キミの部屋でいいのか？」
緊張しながらドアを開ける霊幻に最上はきく。
「？いいだろ、なんで？」
「いや……声とか……まあキミがいいならいいが」
「適当に座ってて」
霊幻は手慣れた様子でベッドの下から洗浄器具を取り出す。音消しにノーパソで適当にYouTubeを再生して、トイレにこもった。
（そ、そわそわする……）
最上は床に座ったり立ったり歩き回ったり意味も無くしてしまう。
（性行に対する知識が……生前見たＡＶしか無い……！）
それも、動揺してしまっている最上は印象に残っていた一本しか思い出せない。
（あれは、女が縛られて逆さに天井から吊るされて……いやいやいや絶対初夜でやるようなモノじゃない！！！！）
更に焦った最上はテーブルの上に霊幻が置いて行ったコップを手に取る。
ぐいと傾けた水が霊体を素通りして床にぶちまけられた。
（あああ何をやっているんだ私は！！落ち着け……こういうのは自然にだな、成り行きに任せて……）
カーペットの水を霊幻が脱ぎ捨てた靴下でこすりながら、はたと最上は手を止める。
（自然な霊姦ってなんだ……？）
「最上さん、何してんだ？」
風呂から出てきた霊幻が訝しそうに最上の手元を覗く。
「い、いや、水を飲もうとしてこぼしてしまってな……」
「なんだ、それ。緊張してんの？」
くすくす笑う霊幻に、最上はバツの悪そうな顔をする。
「そりゃあ、する。……こう言ったことは経験が無い」

「えっじゃあ俺が初めて？生前含めて？」
最上が小さく頷くと、霊幻の顔がさっと赤くなる。
「こういうの、気にしない方なんだけどさ……そう言われると、ちょっと、嬉しいな」
最上は思わず霊幻の肩を掴んで、口付けた。
「ちょ、ん、もがっ、ん……！」
何度も唇を離してはまた合わせて、最上はそのままぐいぐいとクマベアーパジャマ姿の霊幻をベッドに押し倒す。
（つめたい……）
最上に触れられている霊幻の肩が、擦り合わさっている足が、ゾクゾクと冷えてくる。
（霊障ってやつ？）
はっ、と思わず霊幻が凍える息を吐けば、それを誘いと取ったのか最上はぐぽっと舌を突き入れた。
「んぐっ」
慣れていない最上は霊幻の頭を両手で挟み込むように押さえて、動けなくしてから口の中を蹂躙する。
（喉に無理矢理フラペチーノの塊を流し込まれるみたいだ）
冷たいが、甘露だ。
霊幻は実体化している最上の両手に自分の両手を重ね、辿々しく舌で最上のベロの裏をしごく。
「……っ」
その未熟で淫靡な応答に、さらにかぶりつこうとした最上の膝が霊幻の秘部を押し上げた。
「ぁっ！」
びくんと霊幻の腰が跳ね、かりっと最上の指を縋るように引っ掻く。
弱点を知られた霊幻が、さっと怯えるような瞳を最上に向ける。補食されることを悟った小動物のような瞳が、期待で潤んでいた。
「新隆くん……」
唇に、頬に、まぶたに口付けを落としながら最上はぐいと霊幻のスウェットを下着ごと太ももまでずり下ろす。雪の結晶のようなキラキラした氷がキスマークのように霊幻の肌やまつげに残ってしまっ

たので、慌ててそれを手ではらい、パタパタと手と顔を打ち合わせて温度を調整した。
「あっ……」
それでも冷たい手が霊幻の陰茎を包んで、生前から体温低めだったんだろうな、と霊幻はひとりごちた。
「感じるか？」
手淫するように最上はごしごしと優しく手で霊幻の性器をいじる。その光景に色気は無かったが、ストイックな最上がそんな淫らなことを自分のためにしてくれている、と思うだけで霊幻はたまらなかった。
「ぅ、うん、きもちい……」
その返答に気を良くしたらしい最上が、ぞろりぞろりと手を這わせてクマベアーの下を撫で上げる。あまりクマベアーは気にならない方らしい。
「ぁ……」
硬い男らしい指先が、乳首の先端を掠めた。
「ここも、気持ちいいか？」
「きもちいぃ……」
多幸感でふわふわしてきた霊幻は、トレーナーの裾を捲り上げるように両手を突っ込んで、最上の手とむつみ合わせるように自ら乳首をいじり始める。
「なんだ、エッチだな」
「んふ、なんか、最上さんがエッチって言う方が、エッチだ」
くふくふ笑い合いながら、トロリと汗ばんできた肌をまさぐる。
服の下で見えなかったのか、ずぷりと最上の指が肌の下、乳腺を撫でた。
「ァッ！？！？」
霊幻が衝撃に目を見開く。
「ん？ナカを触ってしまったか」
「そっ……それえ、ヤバっ……！」
「こうか？」
「んァァアァアッ♡♡♡」
２人が知らないデリケートな神経をそれゆえに無造作に触られて、

霊幻は絶頂の寸前をビリビリと味わう。
「……出していいぞ」
肌を白猫の耳のようにピンクに染めて悶える霊幻に生唾を飲みながら、最上はシュッシュと霊幻の性器をこする。
「そうそう出ねえの、知ってるだろ！！」
「あ」
ただ気持ち良すぎて苦しいだけの霊幻が思わず叫んで、最上は手を止めた。
「後ろ……うしろ、挿れて……そっちなら、イけるから……」
霊幻はズボンを下着ごと脱ぎ捨てる。
また最上はごくりと生唾を飲んだ。
「……せっかくだから、記念撮影するか？」
「なっっっんの記念だよ！！」
「……処女童貞卒業？」
「ハメ撮りなんだか心霊写真なんだか分からんものが撮れるわ！！後世の霊能力者がどうしていいか分からんモノ残してやるなよ……」
「一度きりだからな、惜しいと思ってしまった」
「……最上さんってカメラ慣れし過ぎてて、変なとこぶっ飛んでる？」
霊幻はゴソゴソとローションとコンドームを取り出す。
「あ……っ、と。ゴムは意味ないか」
「霊素がコンドームでキャッチできるなんて聞いたこと無いな……やってみないと分からないが」
「いいよ……せっかくだからさ、ナマでやろうぜ」
霊幻はくるくると自身にコンドームを被せる。ベッドをなるべく汚したく無かった。明日からも使うので。
「じゃあ……」
「待って、もっかいチェック」
霊幻はパチンとゴム手袋をして、ローションを垂らして後ろを慣らす。
「……ん、もう大丈夫」
「……ああ」

パサリと霊幻は手袋を床に落とす。
２人の緊張が伝わるように、部屋の中に雪が降り始めた。
「最上さん、怪異起こってる」
「あ、すまない」
最上が手を振ると雪は一瞬で溶けた。
「……挿れるぞ」
「ん……」
ぐぬぬぬ、と圧迫感が霊幻の腹まで競り上がってくる。
「あぁあああぁ……っ」
（太いチューペットでも突っ込まれたみたいだ）
冷たいのに、圧迫感で熱い。
は、は、と霊幻は何度か息を吐いて。
「……最上さん、動いて」
「……ああ」
テクニックもへったくれもない、ただ「愛している」と狂おしいほどに叫ぶような抽挿。
「あっ！ァっん、んあ……っ！！」
それに霊幻は感じいる。魂が、痺れてくる。
「新隆くん、新隆くん……」
最上は腰を打ちつけながら、かきあげるように霊幻の髪を撫でる。
その優しい手に、何故だか霊幻は泣けてきた。
「も、っと、はげしくしても、ぉっ、いいからぁ……っ！」
「……ッ！！」
息を呑んだ最上がぐいと霊幻の腰を引く。
「あァアッ……♡」
霊体が前立腺を穿って、ひくひくと霊幻は甘イキした。
「やぁっ♡♡もがみさっ、おれぇっ、もう……ッ♡♡♡」
「いってくれ、合わせるから」
こくこくと霊幻は頷く。
「イくぅ……ッ♡♡♡♡♡♡」
「……ッ！」
ぎゅうと最上を咥え込んで搾り上げる霊幻のナカに、最上はなにかを注ぎ込んだ。

※

「……まだジンジンする」
みじろぎする度に甘い快感が霊幻の腰にわだかまる。
「身体の調子は？思わず霊力か何か出してしまった。今の所霊障は見当たらないが……」
冷たい手が下腹をそっと撫でるだけでも、霊幻はたまらない。あるはずのないみだらな臓器がきゅんきゅんと痙攣する。
「むしろ、身体の調子はいいぐらいだけど」
「……キミは霊力を受け止めやすいのかもな」
最上が手を離して、霊幻はホッとした。
「さて、これで祝福から外れているといいが……」
「どう？外れてる？」
最上はジッと霊幻を見つめる。
「……駄目だな。祝福されたままだ。……………………新隆くん、ヨシフくんを呼んで、」
「ふーん、じゃあ何とかしてくれよ、最上さん」
「……はぁ！？」
「ぱぱーっと解決してくれよ。……出来るだろ？最上さんなら」
ニッ、と笑う霊幻に、最上は大笑いしてしまった。
「そうだな……そうだ！！キミが味方なら、きっと出来るとも！！」
最上は霊幻を抱えて窓から飛び出す。
「うわわわわっ！？」
「現場はあそこだな」
ふわふわと２人は上空から橋を見下ろす。
「ふむ……まず調べ物をしないとな」
「調べ物？」
「この橋の周りには神社や寺、祠は存在しない。生け贄を捧げていたのならあって然るべきだ。無いということは、そんな事実は無かったのかも知れない」
「えぇっ！？」

「フラフラと幽霊が水場に集まる。それを見た霊力のある人間が、『この橋には人身御供があったのでは？』と噂する。幽霊よりも噂の方が力があり、幽霊の存在が噂に引っ張られてしまう……ということが無いではない」
「ほぉー……じゃあどうやって調べるんだ？」
「掘り返せば良い。人骨が出れば人身御供、でなければ噂だ」
言うが早いか、最上は手をかざして下の土ごと橋を宙に浮かせた。
「もももももももも最上さん！？！？」
「残念だな、人骨が出た」
最上はめぼしい人骨だけ土塊の中から取り出し、土と橋を雑に元に戻した。
「これ大丈夫なのかな……」
「さて、話でも聞いてみるか。そうそう、聞こえている。うん……なるほどな……それは大変だな……いや身の上話はもういい、要点だけ言え。……うん、うるさい黙れ早くしろ」
「最上さん！？！？！？！？」
見物人が霊幻を指差して「人が浮いている」と騒ぎ始めた。そちらも気になるのに霊幻は最上の暴言も聞き捨てならない。
「ちゃんと話してだな……！」
「そういうのはキミの仕事だろ、霊の声ぐらい聞こえるようになれ。どうやら、彼らは『神様に成れる』と言われて命を捧げたらしい」
「神さまに……」
「しかし約束の社は建てられず、現代まで来てしまった。彼らは自分が神に成ったと信じ込んで、ご利益を手当たり次第に与えようとした。しかし祀られていない彼らは神では無い。無意識に相手から代償を回収してしまった。その多くは命だった」
「……どうするんだ？」
可哀想、という音を滲ませて霊幻は訊く。
「ただの悪霊なら喰って終わりだが、こうなると村の連中の方が私には気に食わん。約束通り神社を作って、祀ってやろう」
「神社作らせるのか？あの人たちやるかな……」
「いいや」

最上はぐっと伸ばした手のひらを握り込む。グシャっとやたら豪華な（キッチンジャグジー風呂ベッドバーカウンター付き）公民館が瓦礫になり、最上はそれを適当に道路に掻き出す。
「ももも最上さん！？」
「早口言葉みたいだな……もももすもももももものうち、だったか？」
その辺の日本家屋から壁や柱、屋根をバキバキと外して、マインクラフトのように最上は神社を建て、そこに人骨を祀った。
「あとは勝手に連中が騒ぎ立てて神格を上げてくれるだろうよ」
「いやいやいやいや何してんの！？俺に相談も無く何してんの！？！？」
「相談したら賛成してくれたか？」
「するわけないだろ！！」
「だろうな。私に任せたのはキミだ。祝福は本来の祝福になり、代償は無くなった。あとはキミがほうぼうに頭を下げるだけだ」
「何言ってんのおおおお！？！？最上さんが謝るんだよ！！」
「当然必要であればそうするが……あのへんの民間人にはキミがそうしたようにしか見えんぞ」
「あああああああ！！」
霊幻は足元の警官も含んだ野次馬に頭を抱える。
「なに、後ろめたい連中は何も言わんさ」
「ホントに……こんなの祟りとか通り越して神罰じゃないか……」
「神罰か、いいな！！彼らは好きなように畏れるがいい。自分が恐れたものが、自分に罰を与えたと」
霊幻は肩をすくめる。
「とにかく、取り敢えず、ありがとな」
「いいさ。いつでも頼ってくれたまえ。恋人の頼みならなんでも叶えてやるとも」

もう絶対軽々しく頼まない。

恋人に甘く綺麗な笑顔を向けながらも、霊幻はかたくそう誓った。

おしまい。